

1. 流入負荷量の現況値の把握の必要性

H10 年度計画で「S40 年代の流入負荷量レベルに戻す」としているが、現況の流入負荷量も含めて把握は本当のところは判っていないのではないか。現在、誰がどうつかんでいるかも判らない。今後どのようにモニタリングしていくかを検討する必要がある。

2. H10 計画で策定された以外の施策にも注目

合流式下水道改善対策など H10 年度時点で策定されていない施策の進捗や効果について着目していくことが重要。

・ 下流域への影響を念頭に置いた課題抽出

流域側のインパクト（例えば流入負荷量）の変化に対する湖側のレスポンスのレビューを明らかにする必要がある。湖底部の低酸素水塊の上昇などがもたらす水質への影響は、淀川流域を含む下流域においても懸念される。

・ 温暖化等新たな課題への対応

湖底部の DO 値（生物生存に係わる 2~3mg/L など）など指標の管理が重要で、温暖化を背景に近々問題が顕在化すると考えている。

・ 水利用・レクリエーション利用の観点からの点検が必要

水浴場における糞便性大腸菌群数等の通年モニタリングや微量化学物質や医薬品の環境中への暴露を背景として、琵琶湖の水質が水利用・レクリエーション利用に照らして満足しているか否か検証していくことが重要である。

・ 危機管理を念頭に置いた総合保全

流域 1400 万人の水道水源であることを念頭に水質事故（油流出、化学物質、タミフルなどをはじめとする医薬品等々）をはじめとする様々な危機管理体制の整備が当初の計画に入っていないが、今日的には問題だ。

以上